

21 世紀の生命を育む

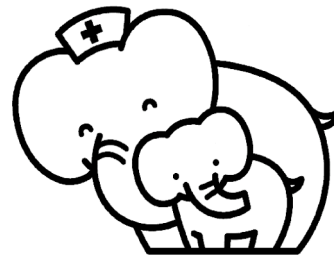
はしもと小児科

〒954-0112 見附市上新田町 449-7

TEL 0258-61-2400, 予約専用 61-2401, FAX 61-2402

<http://www.mynet.ne.jp/hasimoto/>

院長 橋本尚士：新潟大学医学博士，日本小児科学会認定小児科専門医，日本アレルギー学会認定アレルギー専門医
日本小児感染症学会推薦インфекションコントロールドクター（感染制御医：ICD）



ぞうさん通信 2010.6.29

はしもと小児科ホームページ <http://www.mynet.ne.jp/hasimoto/>

メールマガジン「ぞうさん通信」発刊中。上記 HP よりお申し込みください。

2010-11 シーズンのインフルエンザワクチン

従来の季節性インフルエンザワクチンには，Aソ連型（H1N1），A香港型（H3N2），B型の3つの株が含まれていました。2009年に新型インフルエンザ（H1N1）が発生し，世界的に大流行をしました。2009年秋には，日本では，季節性インフルエンザワクチンと新型インフルエンザ単独ワクチンが併用されました。皆さんご存知の通り，インフルエンザワクチンをめぐって医療現場では大混乱が起きました。

2010年2月18日，世界保健機構（WHO）は2010-11シーズンの北半球におけるインフルエンザワクチン推奨株を A/カリフォルニア/7/2009（H1N1），A/パース/16/2009（H3N2），B/ブリスベン/60/2008の3株にすると発表しました。選定理由は以下の通りです。

2009-10シーズンは世界各国で新型インフルエンザが大流行しましたが，分離株は遺伝的に均一で，A/カリフォルニア/7/2009（H1N1）に類似したものでした。Aソ連型（H1N1）はほとんど分離されませんでした。A香港型（H3N2）は複数の国で散発的に発生しましたが，A/パース/16/2009（H3N2）に類似していました。B型はアジア，オーストラリア，ニュージーランド，アフリカの数カ国，ヨーロッパ諸国，アメリカ大陸の多くの国で発生がありました。B型インフルエンザウイルスは，ビクトリア系統と山形系統に2大別されます。2009-10シーズンは両者が流行しましたが，前者が優勢でB/ブリスベン/60/2008と抗原性が類似していました。

WHOは，2010-11シーズンは新型インフルエンザ（H1N1），A香港型（H3N2），B型が流行する可能性があり，新型インフルエンザ（H1N1）が優勢になる見込みが強いと予測しています。Aソ連型（H1N1）は流行するとは考えにくいいため，ワクチンに加えることを推奨しませんでした。

日本国内における動向は以下の通りです。

2010年6月23日，厚生労働省健康局結核感染症課は2010-11シーズンのインフルエンザワクチンについて国立感染症研究所の検討結果報告に基づき，A/カリフォルニア/7/2009（H1N1）pdm高増殖株 X-179A，A/ビクトリア/210/2009（H3N2）高増殖株 X-187（WHO推奨株の類似株），B/ブリスベン/60/2008の3株とすることを決定しました。

2010-11 シーズンは、インフルエンザワクチンの小児への接種量が増量される見込みです。従来、1回の接種につき1歳未満には0.1ml、1-6歳未満には0.2ml、6-13歳未満には0.3mlを2回接種していましたが、効果が低くなる場合があると指摘されていました。HHOの推奨する用量は、1回の接種につき3歳未満には0.25ml、3-13歳未満には0.5mlを2回接種です。独立病院法人国立病院機構がこの用量による臨床試験を全国の8医療機関で実施し、既に効果が確認されています。ワクチンメーカーは接種量の変更申請を既に行ったようです。

2010-11 シーズンに向けては、(1)小児への接種量が増量されるため、ワクチン必要本数が増える。(2)小児への接種量変更に伴い添付文書の改訂などが必要になるが接種時期の10-11月に間に合うかどうか不明。(3)新型インフルエンザウイルスは鶏卵での増殖が不良なため製造量を大幅に増やすことは困難である。(4)2009-10シーズンに厳しい国家管理下に供給された新型インフルエンザ単独ワクチンは价格的に割高であったため、2010-11シーズン用ワクチンの価格アップの可能性がある、など懸念材料が多いのが現状です。不確定な部分が多く、私たち医療機関側も心配しています。新しい情報が入ったら逐次お知らせする予定ですが、接種開始時期、接種料金などは直前になるまで分からない可能性が大です。

ぞうさん通信2010.6.29, 見附市上新田町449-7 はしもと小児科, 院長 橋本尚士
新潟大学医学博士, 日本小児科学会認定小児科専門医. 日本アレルギー学会認定アレルギー専門医
日本小児感染症学会推薦インфекションコントロールドクター (感染制御医:ICD)